

岩手医科大学歯学会第24回例会抄録

日時：昭和62年6月27日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階第4講義室

演題1. GLUMA処理法を応用した光重合コンポジットレジンシステム013-LGの臨床成績

○小原 雅彦, 石橋真喜子, 佐々木 順
佐藤 聖, 西山恵美子, 小山田勇樹
菊地由紀子, 中嶋 和郎, 佐藤 保
安藤 良彦, 久保田 稔

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座

【緒言】MunksgaardらはEDTA処理した象牙質面にGLUMA(GlutaraldehydeとHydroxyethylmetacrylate {HEMA}の水溶液)を塗布しコンポジットレジンの象牙質への強固な接着を得る技法を報告した。今回我々は、同様な方法により象牙質との接着を得るレジンを経臨床に使用する機会を得たのでその臨床成績を報告する。

【方法】被験歯は本研究に同意の得られた29名の53歯である。実験材料はバイエル社製光重合型コンポジットレジンシステム013-LGである。通法にて窩洞を形成し、製造業社の指示に従い歯面を処理しレジンを填塞した。填塞1週後の研磨時および1、3カ月後にリコールし経過を臨床的に観察、評価した。観察は歯髓症状と修復物の状態について行った。評価は総合的に良好、概良、不良の3段階とし、良好は臨床的に全く問題がない。概良は多少の問題はあるが臨床的には許容出来る。不良は再修復や歯髓処置を必要とした症例である。

【結果ならびに考察】臨床成績は良好48例、概良3例、不良2例であった。判定の理由は不良2例が脱落、概良2例が表面の粗造感と着色、1例が歯髓刺激症状を生じたためであった。

僅か3カ月の観察期間において53例中に2例の脱落を認めた事は良好な成績とは言い難い。しかし、脱落した1例を再度本材料で修復したところ4カ月の現在に至るまで良好に経過している。この事からすると脱落の原因は、防湿や修復の操作ミスが疑われる。

歯髓刺激症状を示した1例は修復1カ月後のリコー

ル時に軽度の冷水痛を訴えたが3カ月後には消退し歯髓は生活状態にあった。しかし、教室の安藤らコンポジットレジン修復に伴う歯髓刺激は無症状に経過し歯髓死に至る事があると報告しているため、この問題を含め永久修復材料として必要とされる更に長期間の観察を行い報告したい。

演題2. 矢巾地区10世代でみた食傾向と歯科疾患の実態について

○佐藤ひとみ, 亀谷 哲也, 岡田あゆみ
加地 以子, 高山志津子, 猪股恵美子
金野 吉晃, 天野 昌子, 鈴木 尚英
清野 幸男, 八木 實, 中野 廣一
三浦 廣行, 石川富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

最近の若い世代では、不正咬合の増加ばかりではなく、顎関節の異常も多いといわれている。また同時に、幼若年層に、歯肉炎の増加が著しいともいわれている。これらはいずれも、現代の軟かい食べ物を中心とする食生活の影響を受け、咀嚼運動量が低下したこと、あるいは自浄作用が不足したためと考えられる。これらの点を明かにするため岩手県矢巾地区の1～60歳の776名について、アンケートによる食事パターン調査、食事記録調査、ガム咀嚼、口腔内調査などを行い、歯科疾患と食生態の関連性について検討した。

不正咬合では、とくに中学生、高校生、および20歳代に叢生が多く、約30%にみられた。またdiscrepancy要因の増加は、第3大臼歯の発育が咬合に影響してくる高校生に高く(70%)みられた。歯肉炎は幼児から約80%に認められ、とくに小学校の低学年から付着歯肉にまで炎症の及んでいる例も、僅かではあるが認められた。

一方、食事調査では、とくに顎の発育と関係があると思われる。食べ方、噛み方、摂食行動、流し込み摂食などの事項について調べた。これによると、